

前回に続いて、筋萎縮性側索硬化症（ALS）について、歯科からみた問題点と口腔ケアの注意点を考えてみます。

② ALSの全身の筋力低下の進行とともに、上肢下肢の運動機能・手指の動き・頸部保持・咀嚼嚥下・発声発語等が次々と困難になり、まったく動

けない・食べられない・しゃべられない寝たきりの状況となります。

ただ知的レベ

ルは保たれるため、できるだけコミュニケーションがとれる手段を確保する必要があります。よく使われる媒体として、視力と目の動きだけは障害をうけにくいいため、五十音表や多用される語句を書いた透明プラスチック板があります。術者や介護者は、目の動きから瞬時に五十音表を読み取り、本人の意向を把握できるようにしておかなければなりません。

③ ALSの場合、舌の萎縮によ

り咀嚼嚥下機能が障害されますが、口から食べられなくなっても唾液や口腔内細菌を誤嚥し、嚥下性肺炎を引き起こす危険性があります。口腔ケアの際の歯ブラシは、口腔粘膜の脆弱性を考慮して、植毛部分ができるだけ柔らかいものを選ぶようにします。また、開口障

害（口が開かない）の方も多いので、植毛部が小さいのがよいでしょう。現在、このような目的で、要介護高齢者用の毛先が小さくて柔らかい歯ブラシが歯科医院で買えるようになっていました。さらに、開口障害があり口唇の弾力が衰えて、歯ブラシを動かし

筋萎縮性側索硬化症（ALS）(2)

介護保険特定疾患別口腔ケア(5)

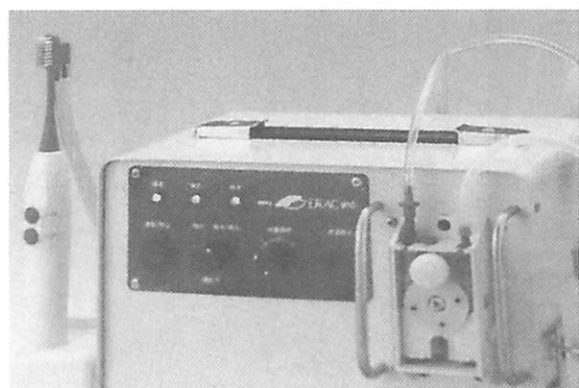


写真1 全介護者用口腔ケアシステム

にくいことがあります。このような場合、電動歯ブラシも有効です。一方、以上をまとめて、乾燥気味の歯ぐきに水分を与えて快適なブラッシングができるように、また、その水分や唾液あるいはブラッシングによって除去された菌垢や口腔内細菌を吸引できるように、さらに電動歯ブラシでスムーズな動きができるように、という目的で開発されたのが、全介助用口腔ケアシステムです（写真1）。

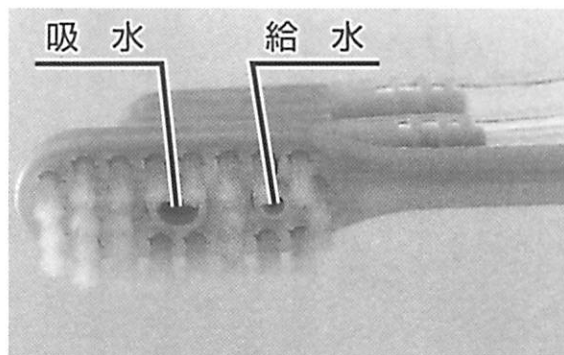


写真2 給水・吸水機能を備えた、歯ブラシの植毛部の拡大

給水・吸水機能を備えた歯ブラシを用いると、清掃効果の向上や誤嚥防止とともに介助者の負担軽減にもつながります（写真2）。

なお、この全介助用口腔ケアシステムは、第16回全国健康福祉祭（ねんりんピック徳島2003、10月18日～21日、アステイトくじま）において、歯の健康コーナーの『介護歯ブラシ体験ブース』にて、どなたでも体験できます。

徳島県歯科医師会

口腔ケア支援センター

担当理事 佐藤 修彦

(088) 631-3977